追悼文

伊藤隆先生からの宿題

江崎　道朗（本研究会副会長・麗澤大学客員教授）

日本近現代政治史研究の第一人者として知られる歴史学者で東京大名誉教授の伊藤隆先生が8月19日、お亡くなりになった。謹んで哀悼の意を表するとともに、これまで歴史認識問題研究会顧問として私共に対して懇切にご指導をいただいたことに、心から感謝申し上げたい。

以下、個人的な思い出を書き残すことで、伊藤先生に対する追悼とさせていただきたい。

伊藤先生との御縁は、私が平成30年（2018年）10月25日、アパ日本再興財団から「第１回アパ日本再興大賞」をいただいたことから始まった。

「アパ日本再興大賞」は、誇りある祖国である日本の成長発展に資する近現代史、国際関係、政治・政策等の分野における研究を促すとともに、優れた研究成果を広く周知するのが目的であり、過去５年以内に発刊された書籍や発表された論文から選出されている。その栄誉ある第一回に拙著『日本は誰と戦ったのか　コミンテルンの秘密工作を追及するアメリカ』（ＫＫベストセラーズ）が選ばれた。

その審査にあたったのが、外交評論家の加瀬英明氏を審査委員長として、東京大学名誉教授・政策研究大学院大学名誉教授の伊藤隆氏、東京大学名誉教授の小堀桂一郎氏、報知新聞社前会長の小松崎和夫氏、衆議院議員（環境大臣）の原田義昭氏の四氏であった。表彰式は12月７日には東京都港区の明治記念館にて行われ、その席上で初めて伊藤先生とお会いしたが、日本を代表する近現代史の大家がなぜ私のような一評論家の著作を選んでくださったのか、不思議でならなかった。

ところがその後、電子メールでのやりとりが始まり、伊藤先生の御自宅近くで話をするようになった。伊藤先生は戦後の我が国のアカデミズム、特に近現代史研究の在り方についてかなり憂慮されておられ、しきりに私に対して近現代史研究に打ち込むよう勧めてくださった。

私は大学こそ文学部だが、哲学科であり、かつ社会人になってからは雑誌編集、その後は国会議員の政策スタッフを務めてきており、学者ではない。たしかに近現代史に関する評論も書いているが、それは外交や安全保障の関係で、いわゆる南京大虐殺や慰安婦問題、靖國神社、天皇と大日本帝国憲法などを中心に近現代史について向き合わざるを得なかっただけだ。歴史学者として専門的に研究をしてきたわけでない。よって伊藤先生から、近現代史研究を勧められても困惑するしかなかった。

だが、伊藤先生は次のようなことをおっしゃられた。

第一に、近現代史を研究するに際して政治家の日記やインタビューを読み解くことになるが、政治の現場を知らないと、誤読する恐れがある。そこで政治の現場を知る人たちの書いたものを読むようになり、月刊『正論』に掲載されていた「SEIRON時評」も読む

ようになった。江崎さんのような政治の現場を知る人が近現代史をどのように見ているのか、かなり前から興味をもっていた。

第二に、戦後の歴史学会は、マルクス主義の影響が強く、共産主義やコミンテルンの話はタブー視されることが多い。この共産主義やコミンテルンの動向を実証的に描こうとしている点にも注目していた。特に戦前、マルクス主義に対抗しながらも東條政権によって批判された山本勝市博士の議論に江崎さんが注目していることには驚いた。

第三に、近現代史研究に際しては実証的に研究すべく政治家を含む当事者たちの日記や記録などを整理し、発刊してきた。しかしそれはあくまで国内、日本人のものが大半だった。ところが江崎さんの著作を読んで、アメリカ政府が公開したヴェノナ文書など、共産主義、コミンテルンの対外工作に関する公的記録が多数存在していることを知った。こうした外国の公的文書、それも共産主義に関わる文書を踏まえて近現代史を見直す必要性を痛感するようになった。よって江崎さんは、まずはヴェノナ文書の存在を紹介する学術論文を書いて、学会誌に投稿すべきではないか。

第四に、近現代史研究に際してイデオロギー先行ではダメだが、だからといって実証研究ならばそれでいいというわけではない。やはり視座というものが必要だ。そして江崎さんは戦前の日本を「右翼全体主義」「左翼全体主義」「保守自由主義」という形で分けて論じていて実に興味深い。こうした歴史観について学問的に論証していくべきではないか。

――こうした伊藤先生からの問いかけに対して、歴史学者ではない私には無理だと何度か申し上げたのだが、せめて問題の所在だけでも記録に残そうということになり、月刊『正論』誌上で対談をすることになった。

対談は2020年12月、伊藤先生の御自宅の近くのレストランで行われ、月刊『正論』2021年2月号に「マルクス主義支配の歴史学界を憂える」と題して掲載された。その対談で伊藤先生は次のように指摘されている。

第一に、マルクス主義的な歴史研究、東京裁判史観の問題点だ。

《日本の歴史研究は、一貫してずっとマルクス主義的な歴史研究に傾斜してしまっていることは確かです。平成二十五年の話です。私は『史学雑誌』という東大の史学会が出している雑誌に「『東京裁判史観』を想う」と題する文章を寄稿したことがありました。

戦争にかかわる苦難や窮乏などすべての災厄が全て日本の「軍国主義者」が悪かった―という図式に押し込められてしまう「東京裁判史観」によって、太平洋の覇権をめぐる日米の対立や、日本と対立した中国を援助した米国との対立といった側面はほとんど無視されている。また、日米対立には人種対立の側面もあります。江崎さんが『日本は誰と戦ったのか』で追及されたコミンテルンの秘密工作も重要です。アメリカでは米国史の大家、チャールズ・A・ビアードが『ルーズベルトの責任　日米戦争はなぜ始まったか』が昭和二十三年に刊行されましたが、これが日本に紹介されたのは何と平成二十三年でした。

「なぜ日本は戦争をしたか」という一点だけでもこれだけさまざまな研究がなされ、色々な問題提起が出ているのに、それらは決まって日本内部の要因にのみに限定されて、アメリカやコミンテルンによる要因は直視されていない。見えないのではなく見たくないのです。ＧＨＱ（連合国軍総司令部）と親和性の強かった日本の共産主義者が日本史研究や教育現場に大きな影響力を持って旧態依然としているからです。》

第二に、冷戦終結後に情報公開された外国の公文書を踏まえた近現代史研究の必要性だ。

《昭和から平成に変わる時期に、ソ連が崩壊したでしょう。あのとき左翼の人たちの研究論文の引用文献からマルクスやレーニン、スターリン、毛沢東など共産主義者の名前が一斉に消えました。彼らは今も大人しくなり、私に反論もしなければ、たいした議論もせずに過ごしている。「ヴェノナ文書」など存在を今も見ようとしていないんですよ。でも探ると、やはりマルクス主義に根差している。

『シリーズ日本の近代―日本の内と外』で私は、第一次世界大戦終了を境に、日本の独立を獲得する戦いと、マルクス主義との戦いに分けて書きました。ですが、江崎さんの著書を読んで「これはなんとかしなければならない」「補足しなければならない」という考えになりました。ソ連崩壊で世界的な構造が変わったわけじゃないんですよね。》

第三が、視座なき実証主義でいいのか、ということだ。

《**伊藤**　マルクス主義者やマルクス主義に影響を受けている人たちは、それが物の見方の軸になっているわけです。これを失ったら頼るものがなにもない。捨てたら別の見方があるわけじゃなく、視座を自分でつくらなければいけない。私だって若いころ、非常に苦労した経験がありますが、なんとなく「これでどうか」と考えていく以外ない。ただ、多くの人たちはそれをやっておらず、逃げていると言わざるをえない。「実証主義」に走る人もいて、非常に細かな問題は扱うのですが、ではそれが歴史研究のなかで、どこにどうつながっているのかが分からない、という話になる。そういう論文がいっぱいありますよ。

「実証主義」だろうが、何だろうが、歴史的な事実をどういう枠組みで見るか、どういう連続性の中で見るか、国際的な目線やあるいは国内的な目線で見るとか、いずれにせよ視座や、よって立つ論理がないと説明が付かないし、実証研究など成り立たないんです。ただ、「こういう資料がありました」「こういう事実があった」で終わってしまう。非常に厳しいのです。

江崎　ご著書の『昭和初期政治史研究』（東京大学出版会）で先生は、マルクス主義に基づく発展段階説などに代わって、新しい枠組みを示されました。「漸新（現状維持）」か「革新（破壊）」かと、「復古（反動）」か「進歩（欧化）」かという二つの座標軸によって当時の政治を分析・検証し、「大正デモクラシー時代」「ファシズム時代」といった時代区分に疑義を投げかけられました。

この枠組みは伊藤先生が学生時代から懇意にされていた佐藤誠三郎先生（東大名誉教授、故人）たちとの議論から生まれたのでしょうか。

伊藤　いや、必ずしもそうでもないんです。あれは私が勝手につくったものです。学生諸君に私は「君たちにこの枠組みを強制するつもりは毛頭ない。枠組みは自分でつくらなければ駄目だ」というんです。修正でも打破でも何でもいい。「そういう気構えがないと、一人前の学者になれないよ」と言いますが、やった人はいませんね。

江崎　現在の近現代史研究を見ていると、結局はマルクス主義の亜流の枠組みに引きずられてしまっていて、「戦前の日本は帝国主義で、帝国主義日本の悪を摘出し、明らかにすることが自由と民主主義を守ることだ」という枠組みにとどまっているように見えます。

伊藤　そうです。今、江崎さんが述べたような日本の戦前の悪をほじくり出して、それを実証主義と思っていたりする。初めから結論が決まっているんです。それをいかにして歴史的な記録から拾い出すかという話です。繰り返しますが、歴史事象を位置付けるには視座がないと書けない。だけど、「いい」か「悪い」は誰でも書けるんです。あの当時、「朝鮮を支配したのは悪かった」「どんな悪いことをしたか」なんて、探せば何か見つかるに決まっていますから、誰でも書ける。でもそれではダメで、結局は歴史の判断基準をマルクス主義に頼ってしまうことになる。自分でつくろうとしている人はあまりいないですよ。》

このように縷々述べられて伊藤先生は、マルクス主義的な歴史研究、東京裁判史観とは違った視座で、外国の公文書なども踏まえた実証的な近現代史研究に取り組むべきだとおっしゃってくださったのだ。

とはいえ、こうした期待に応える力があるとは思えなかった私は、まず伊藤先生の御著者や研究論文を手当たり次第に集めて読み込むようにしたが、私が専門としている安全保障やインテリジェンスに関する研究を優先してきたこともあり、近現代史研究は遅々として進まなかった。

それでも2023年12月、フジサンケイグループから「正論大賞」をいただいたときは、伊藤先生は次のような「お祝いの言葉」を下さった。

《十数年前から、江崎氏の書いたものを拝読し、そのすばらしい論の展開に感服してきたが，その江崎氏がこの度「正論大賞」を受賞された。この上ない喜びである。世界史における日本の評価、特に第二次大戦に至る過程について「悪」は日本軍国主義という議論が圧倒的であった。その論を真っ向から粉砕したと思われた江崎氏の『日本は誰と戦ったのか』をはじめとする論考は、残念ながら今のところ、日本の研究者には読まれていないようである。江崎氏の紹介されたヴェノナ文書も無視されている。この受賞を機会に、多くの近代史研究者が氏の著書を真剣に読むことを期待したい。

江崎氏には、東京裁判、「南京大虐殺」、教育基本法、皇室、アメリカ保守主義、インテリジェンスなどを主題とする多くの著作がある。このところ私も愛読している『正論』連載の「SEIRON時評」は、日本が直面しているウクライナ戦争と経済財政問題など幅広く論じている。その場合も「政治を考える上で参考にすべきは、歴史だ」と江崎氏は主張している。》（2023年12月14日付産経新聞）

今回、突然の訃報を聞いて、「もっともっとお話を聞いておくべくべきだった」という思いと共に、伊藤先生からいただいた宿題に改めて取り組まなければ、と決意を新たにしている次第だ。